九州大学薬学部臨床薬学科の教育・研究に対する外部評価結果について

九州大学薬学部臨床薬学科(6 年制)では、内部質保証の一環として、教育、研究、組織、運営ならびに施設設備の状況などについて自己点検・評価した内容を第三者の視点から点検・評価し、今後の本学部における薬学教育・研究の改善に活用することを目的に外部評価を実施した。

[実施委員会]

薬学部 自己点検・評価委員会メンバー

・委員長(小柳 悟 学部長)
・教務委員から選出された3名(平井 剛 教授、松永直哉 教授、小林大介 講師)、
・学外委員 (下記4名)

[学外委員]

藤 秀人(富山大学 学術研究部薬学/和漢系・教授)
寺薗 英之(鹿児島大学病院薬剤部 薬剤部長・教授)
牛島 健太郎(山口東京理科大学・教授)
堀口 道子(岡山大学 薬学部・教授)

[評価スケジュール]

・令和7年12月9日～令和8年1月9日 自己点検評価書および関連資料の事前評価(書面審査)

・令和7年12月17日 薬学教育自己点検評価委員会の設置を教授会で承認
・令和8年1月24日 薬学教育自己点検評価委員会(Web 会議)開催
・令和8年2月20日 評価結果の公表(薬学部 HP)予定

[評価項目]

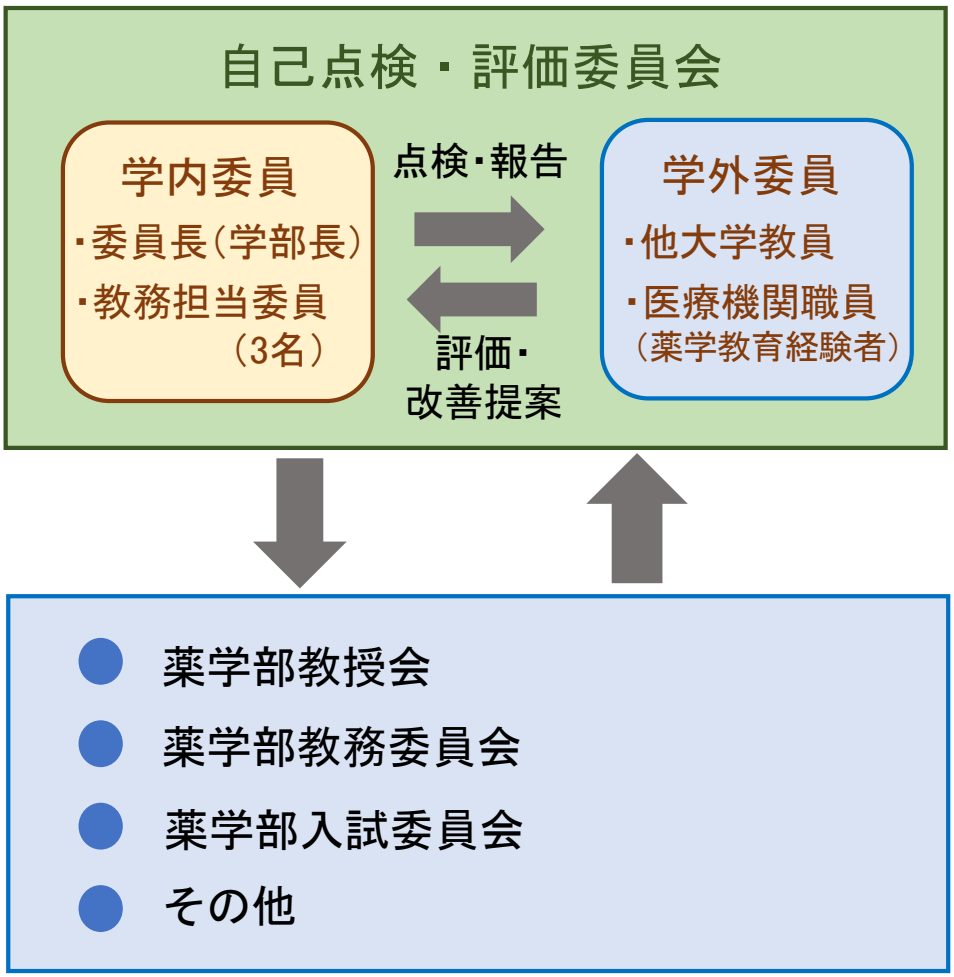
1 教育研究上の目的と三つの方針
2 内部質保証
3 薬学教育カリキュラム
4 学生の受入れ
5 教員組織・職員組織
6 学生の支援
7 施設・設備
8 社会連携・社会貢献

[評価方法]

●五段階評価とコメント(総評と各評価項目)

【評価の段階】
5:高く評価できる
4:やや高く評価できる
3:妥当である(普通)
2:やや不適切である。
1:不適切である(改善を要する)

【九州大学薬学部での自己点検・評価体制】



評価スコア/総評

［各項目の五段階評価］

評価項目	評価の段階				
	評価委員A	評価委員B	評価委員C	評価委員D	平均
1　教育研究上の目的と三つの方針	5	5	5	5	5.0
2　内部質保証	4	5	4	3	4.0
3　薬学教育カリキュラム	3	4	5	5	4.3
4　学生の受入れ	4	5	5	5	4.8
5　教員組織・職員組織	5	4	5	3	4.3
6　学生の支援	5	5	4	4	4.5
7　施設・設備	4	4	5	5	4.5
8　社会連携・社会貢献	5	5	4	3	4.3

項目別 評価コメント

項目	コメント
1. 教育研究上の目的と三つの方針	• 三つの方針が教育研究上の目的と一貫性を持ち、「研究者マインドを持つ薬剤師」という人材像のもとで体系的に策定されている。定期的な検証体制が確立されている点も評価できる。 • ディプロマポリシーを中心に 3 つのポリシーが有機的、体系的に繋がっており、各進級のステージで適正な評価ができるシステムになっている。評価とは関係ないが根拠資料の議事録において、会議参加者が“他 30 名”となっており出席者が明確でなかったことは改善した方が良い。 • 教育研究上の目的と三つの方針は、非常によく練られており、それを実現するために明確かつ適切な教育プログラムが構成されている。 • 教育研究上の目的と三つの方針が明確で、社会で必要な要素を的確に反映しており高く評価できる。目的および方針に沿った具体的な取り組みが十分に進められており評価できる。
2. 内部質保証	• カリキュラム検討委員会を中心とした組織的な自己点検体制が整備されている。それらの点検活動が実際にどのような教育改善につながったのかなど、「成果の可視化」についての工夫が必要ではないか。 • カリキュラム・ポリシーに記載されている「カリキュラムの基本構造」に記載されている区分と（前期 3 年、後期 3 年）と、アセスメント・プランにおける区分（「導入・基礎期（2.5 年)」「発展期（1.5 年)」、「統合期（2 年)」）に違いがあるため、いずれかに統一すべきではないか。 • 自己評価を行うための体制作りは、適正であると考えます。また、それに基づくチェック機能も十分に機能していると思われ、また、不十分である事柄も自己評価できています。 • 内部質保証について明確かつ適性に実施されている。学位授与方針及び教育課程方針について、適切な対応がなされている。修学不良者に対する対応として、履修計画の指導がなされ卒業判定で合格に至った点についても丁寧で高く評価できる。改善報告について、指摘事項が改善されたことが確認できた。
3. 薬学教育カリキュラム	• 令和 4 年度改訂版モデル・コアカリキュラムに準拠し、基幹教育から専門教育、実務実習、卒業研究まで体系的に構成されている。医療系統合教育など独自性の高い教育課程も編成されている。 • 学生実習の担当教員配置割り当て表で各学生の担当が割り当てられているが、仮に各実習施設で起きた課題などを集約･共有する体制が明確でない。体制が構築されていれば体制図の提示が望ましい。

	• 教育カリキュラムは、学年進行に伴って、より専門的かつ深度のある教育プログラムが用意されており、これらに基づく教育によって研究者マインドを持つ薬剤師の育成が期待できるもの考えます。 • 薬学教育カリキュラムについて概ね適切である。実習についても丁寧な運用がなされている。成績の異議申し立てについて、「成績照会・異議申し立てともに、成績評価への疑問に明確な根拠がある場合のみ可能です。」とあり、答案やレポートの返却や模範解答の提示が適切に行われているか、科目間で対応の差が生じていないか具体的な点検を進めて頂きたい。
4. 学生の受入れ	• 令和 7 年度入試から前期日程に個別面接を導入し、アドミッション・ポリシーに基づく多面的評価を強化している。また、定員管理も適正であると考える。 • 様々な障害を有する学生に関する規定や取り組みが、明文化されており、丁寧に配慮されており高く評価できる。一方で入学した場合にも安心して学生生活できるインフラストラクチャーについても HP 等で記載されていると対象学生も安心して受験できるため、記載が望ましい。 • アドミッションポリシーに基づいた入試制度を実施されています。特に、令和 7 年度からは、面接試験も加味され、将来の医療者としての適性も判断しようとする試みがなされています。 • 入学試験実施体制、多様性・障害等への配慮について高く評価できる。事前相談についても丁寧な配慮がなされている。
5. 教員組織･職員組織	• 研究院・学府制度により柔軟な教員組織を構築し、創薬科学科と臨床薬学科の連携体制がとられている。教員組織の構成は、准教授・講師層の中堅教員が薄い印象である。 • 教員組織として SENTAN-Q など多様性を重視した素晴らしい取り組みを行っている。これにより研究･教育体制が diversity、Equity、Inclusion を体現できる取り組みを行っている。 • 薬剤師の資格を有する薬学部教員を九州大学病院の非常勤講師として教育の傍ら、薬剤業務を行わせることで、常に最新の臨床的知識などを教員が取り入れ、学生にその知識などを指導できる体制が組まれています。また、教員個々の能力も高く、高度な薬学教育が実施できる体制が取られています。 • 教員組織・職員組織についておおむね適切である。若手支援、国際的研究リーダー研修、ダイバーシティ・スーパーグローバル教員の育成など充実した取り組みも高く評価できる。優れた業績を挙げており高く評価できる一方、分野毎の教員数や業績の差があり、組織としてのバランスについては継続して検証が必要である。

6. 学生の支援	• 担任制度と研究室配属後の指導体制により、修学支援が適切に行われている。キャンパスライフ・健康支援センター等との連携も確立されている。 • 個々の学生に対応したキャリア支援、障害を持つ学生への配慮、福利厚生、安全衛生、ハラスメント対策に関して充実した体制が取られている。 • 学生の支援体制は、適切であると考えます。 • 学生支援について多様な取り組みがなされており、高く評価できる。キャリア支援の充実、安全管理、障害への対応については関連部署との連携も十分になされている。
7. 施設･設備	• 臨床薬学教育センターの実践的教育設備、グリーンファルマ研究所の高度研究機器、24 時間利用可能な図書館など、教育研究に必要な施設・設備が充実している。 • 障害を持つ学生が入学した場合にどのように生活できるか、満足できるインフラストラクチャーを網羅することは不可能かもしれないが、どのような対策を行っているか案内･説明できる情報を HP に載せることが望ましい。 • 教育・研究に必要な施設・設備が整っていることが確認できた。ShareAID に掲載されている薬学部の共同機器は限定されており、研究機器の共有化については継続して充実を図る必要がある。 • 学部教育及び研究活動に必要な設備は整っている。
8. 社会連携･社会貢献	• 薬剤師会や病院薬剤師会との連携、生涯教育プログラムの提供、アジア圏大学との国際交流など、必要な社会連携活動が適切に実施されている。一方で、社会連携活動が個々の教員の自発性に依存している印象がある。 • 数多くの国際的な大学と協定を締結しており、国際交流も充実している。また、学術雑誌の編纂、倫理委員会の開催、薬剤師会との連携を含めて社会貢献も充実している。 • 地域薬剤師会などと密接な連携体制がとられているとともに、様々な社会貢献活動に寄与しています。 • 地域社会との連携のみならず、国際的な連携や社会貢献が実施されており、非常に高く評価できる。

評価委員	総　評
A	全体として、高等教育機関としてのガバナンスは明確に整理され、組織体系も適切に構築されている。特に教育課程の体系性、入試改革の実効性、施設設備の充実度は高く評価できる。教授数の基準未達成は後任人事により解消見込みであり、中長期的な教員組織計画の策定により持続可能性が確保されることを期待する。
B	すべての項目において高いレベルで運用しており、研究においては国際的にも大きくアピールできる研究を行っている。さらに入学した学生が安心で安全な学生生活を過ごすことができる体制を構築し、質の高い研究者からの教育を受けることができることから、将来の日本を支える人材を育てる事できる組織であると判断する。
C	九州大学薬学部では、育成する薬剤師像として「研究者マインドを持つ薬剤師」を掲げられています。それに基づき教員には、高いレベルで研究業績を有する教員が配置されています。また、薬剤師育成として、九州大学病院に非常勤講師として、薬学部教員を配置し、常に最新の医療に関する知見を得られつつ、それを学生教育に反映できる仕組みを構築されております。また、学生の習熟度に合わせて、学年が進むにつれてより高い臨床薬学教育及び基礎薬学教育が系統的に構成され、教育プログラムも高く評価できます。総合的に、「研究者マインドを持つ薬剤師」の育成を達成するために、教育環境、プログラム、指導教員が整備されています。
D	九州大学薬学部臨床薬学科の教育・研究に対する学外評価者として、すべての項目で適切な教育・研究の質が保証されていることを確認いたしました。先進的な取り組みがなされており教育・研究プログラムが充実していることを高く評価します。継続して取組むべき点としては、薬学教育カリキュラムにおける科目間での対応の差の調査と是正、分野毎の教員数や業績の差の是正、研究機器の共有化を挙げさせて頂きます。